

## P4-23

小腸病変による腸閉塞症状にて発症した、 $\gamma\delta$ 型 T 細胞性リンパ腫 (non-hepatosplenic type) の 1 例

飯岡大, 前迫善智, 中村文彦, 林孝昌,  
大野陽一郎

天理よろづ相談所病院

【緒言】 $\gamma\delta$ 型 T 細胞性リンパ腫 non-hepatosplenic type は、肝脾以外の節外部位を主病変とする稀な疾患である。小腸病変による腸閉塞症状にて発症した症例を経験したのでここに報告する。

【症例】64歳女性。

平成 21 年 6 月より腹痛・嘔吐症状を時々認めるようになる。9 月になり、徐々に症状悪化し精査目的に当院紹介となる。Ba 透視検査にて小腸狭窄を疑われたため、小腸内視鏡検査施行したところ、トライツ靱帯より肛門側 20-30 cm に潰瘍を伴う全周性の凹凸不整病変を認め、同部位生検にて末梢性 T 細胞性リンパ腫診断となった。B 症状は認めず、画像検査 (CT, PET) において同小腸病変周囲の所属リンパ節腫脹を併せて認めたが、肝脾を含め他部位の病変は認めず、臨床病期は Lugano 分類 stage I であった。化学療法による穿孔予防の目的で、腹腔鏡下で同部位切除術を施行し、同切除検体にて $\gamma\delta$ 型 T 細胞性リンパ腫の診断に至った。腫瘍組織は中型から大型細胞のびまん性増殖よりなり、免疫染色にて CD3(+), CD56(+), GranzymeB(+), TIA-1(+), CD20(-), CD79a(-), EBERs(-) であった。造血器細胞表面マーカー解析では、TCR $\gamma\delta$ (+), TCR $\alpha\beta$ (-), CD2(+), CD3(+), CD4(-), CD5(-), CD7(+), CD8(-), CD16(+), CD56(+), CD25(-), CD122(+ weak) であった。G バンド分染法による染色体解析では、複雑な染色体異常を認めたが、hepatosplenic T 細胞性リンパ腫で高率に認める 7 番染色体の異常は認めなかった。43 ~ df45, XX, add(1)(p36), add(1)(p36)add(1)(q44), add(3)(q29), add(4)(q35), -8, add(12)(p11), -13, -13, add(14)(q32), add(17)(q25), -20, + 2 mar [cp10]

【経過】平成 21 年 11 月より hyperCVAD 療法にて治療を開始し、平成 22 年 3 月現在は病勢は寛解で安定している。平成 22 年 5 月に RIST を計画している。

本疾患の報告は稀であり、本症例の臨床および病理学的所見につき詳細に検討し、文献的考察を加えて報告する。

## P4-24

日本における腸管症関連 T 細胞性リンパ腫 (EATL) の病理・免疫組織学的所見と遺伝子異常

菊間幹太<sup>1)</sup>, 竹下盛重<sup>1)</sup>, 中山吉福<sup>2)</sup>, 二村聡<sup>1)</sup>,  
八尾隆史<sup>3)</sup>, 卜部省悟<sup>4)</sup>, 米増博俊<sup>5)</sup>, 松下能文<sup>6)</sup>,  
岩下明徳<sup>7)</sup>

- 1) 福岡大学医学部病理学講座
- 2) 国立病院機構九州医療センター病理
- 3) 順天堂大学医学部人体病理病態学講座
- 4) 大分県立病院臨床検査部
- 5) 大分赤十字病院検査部
- 6) 千鳥橋病院病理
- 7) 福岡大学筑紫病院病理部

欧米では、EATL の 2/3 以上の例は CD56 と CD8 陰性、CD30 陽性の大細胞性リンパ腫 (I 型) で、セリアック病が関連する。残りの例は、CD56 陽性、CD8 陽性の中型リンパ腫 (II 型) である。セリアック病では、腸上皮内リンパ球 (IELs) は T box 転写調節因子 (T-bet) と CD30 を発現する。我々は日本の小腸 EATL 24 例の検討を行った。組織学的に 4 例 (17%) が I 型、20 例 (83%) が II 型で、細胞形質は I 型の 3 例が CD56 陽性、1 例 (4%) のみ典型的 I 型であった。II 型では、16 例 (80%) で CD56、11 例 (55%) で CD8 陽性を示した。腸管症様浸潤は 22 例中 15 例 (68%)、12 例 (55%) で IELs 増加がみられた。背景病変では、5 例 (23%) の IELs に T-bet が陽性、CD30 は陰性であった。6 例の HLA 解析で欧米にみる DQB1\*02 はなく、15 例の CGH 解析では 8q2 (47%)、Xp (53%) と Xq (73%) の増加を認め、9q3 の増加はなかった。日本の EATL は、組織、形質、HLA 型および染色体に関して、欧米の EATL と異なった。セリアック病の有無が、EATL の細胞学的特性に影響を及ぼしていると推測する。